

資料 1

火山観測体制等に関する検討会（第10回）議事概要

1. 検討会の概要

日時：平成26年10月24日（金）17:30～19:40

場所：気象庁講堂（気象庁庁舎2階）

検討会委員出席者：清水座長、井口、石原、大島、岡本（代理：山越）、北川、篠原、棚田、飛田、中田、名波（代理：中込）、藤井、三浦、三上、森澤、森田、山岡、横山（代理：山本）、野上、橋本、藤光委員

気象庁出席者：西出、関田、松森、齋藤、菅野

2. 議事概要

<平成26年9月27日の御嶽山噴火を踏まえた今後の観測体制のあり方>

事務局から、資料1～5に基づいて説明、各委員にご議論をいただいた。委員からの主な意見等は以下のとおり。

○水蒸気噴火の予測のために必要な観測手法について

- ・水蒸気噴火を捉えるためには、地震計や傾斜計などの物理観測だけではなく、火山ガスなどの化学観測や比抵抗、全磁力などの電磁気観測の導入が必要。
- ・化学観測や電磁気観測のデータは専門家でも解釈が難しいことがあるので、一つの観測だけで火山活動を評価するものではなく、多種の観測項目を複合して火山活動を解釈することが重要。
- ・化学観測や電磁気観測において、リアルタイムでの観測には技術的な課題もあり、技術開発も含め行っていくことが必要。
- ・観測機器からのテレメータによる観測だけでなく、丁寧な現地観測が重要。
- ・地方自治体や山小屋の管理者といった常に山を見ている方々からの情報を集めること、そのための地元との顔の見えるネットワークの構築が重要。

○観測施設のあり方について

- ・火口付近の観測を行うためには、観測機器への電力やデータの伝送に用いるインフラの確保が重要な課題。
- ・既存の観測施設の傾斜計等の観測装置の設置環境やデータの品質についても検証と改善が必要。

○その他

- ・観測点の整備だけではなく、観測結果を的確に評価し情報の発表を行う人材も重要。
- ・化学観測や電磁気観測は、データの取得や分析、及び得られるデータの解釈に熟練・専門的な知識が要するため、人材の育成が必要。
- ・過去の噴火についての予測ができなかった事例の検証を行うことが必要。
- ・観測や調査による知見の蓄積に基づき、現象を理解するための学術研究も重要。

3. 今後の予定

- ・次回の検討会は11月中に開催予定。
- ・次回の検討会では、今回行った議論をもとに事務局が作成した、緊急提言に向けた骨子案を議論の予定。
- ・御嶽山の今後の観測体制については、火山噴火予知連絡会の御嶽山総合観測班で検討し、次回の検討会で議論の予定。

- ・ 常時観測火山の見直しについては、次回の検討会で議論の予定。